

1. 組織委員からの報告

(1) はじめに

第23回 IUGG 総会が、去る2003年6月30日から7月11日までの2週間、札幌にて開催された。IUGG (International Union of Geodesy and Geophysics/国際測地学・地球物理学連合) は、国連の国際学術連合 (ICSU) の下で、地球科学に関する専門分野の7つの協会で構成されている連合組織である。その総会は1922年の第1回ローマを皮切りに4年毎に世界各地で開催されてきたが、1999年の英国バーミンガム総会において、今回はアジアで初めてとなる札幌で開催することを決めた。日本は欧米諸国から地理的に遠方であるため参加者の動向が心配されたが、開催した結果は、参加者総数は約4600人 (その内の半数が国外から)、また参加国・地域は約80に達し、これらの数は過去のどの総会よりも多い新記録となり、札幌総会は盛会であった。

IUGG 総会傘下の7協会毎に参加者数をみると、我が IASMAS が最高で約850人、続いて IAGA の約800人、IASPEI の約750人となり、IAG, IAPSO, IAHS, IAVCEI らは400人前後である。無所属の UNION としての参加者は約300人である。また、学生参加者数は約1200人、同伴者は約200人。

総会運営の実行に当たった組織委員会 (LOC) は、この2003年度末をもってその役目を終える予定であり、これを機に、本稿をもって日本気象学会会員への総括的な報告としたい。

(2) 概要

IUGG 総会は、科学的成果の研究発表が行われる数多くの研究集会と、参加国代表者による IUGG ビジネス集会や参加7協会 (気象分野の場合は IASMAS/国際気象学・大気科学協会) の各協会のビジネス集会などから成るが、参加者のほとんどはシンポジウムなどの研究集会に参加し、ビジネス集会には参加していないのが実情である。その他、開催にちなんで色々な企画が実施されたが、これらについては個別に後述される。

会場は、札幌市のオフィス街に位置する4か所で、その中心となったのが高級ホテルのロイトン札幌、その近くの北海道厚生年金会館、札幌市教育文化会館らの約30の会議室と、ポスターセッション専用の会場となった札幌メディアパーク、その他に歓迎式典が行われたやや遠方の札幌コンベンションセンターなどであった。

(3) プログラム

6月30日に開幕し、早々と数多くのシンポジウムが

始められ、別会場のポスターセッションを含め、7月11日の最終日まで約5000件の研究発表があり、全ての会場において熱心な討論が繰り広げられた。

開会3日目の7月2日夜には、天皇皇后両陛下をお迎えし、厳粛に歓迎式典が行われ、天皇陛下からは地球科学に対する期待と激励のお言葉をお受けし、海外からの参加者も深く感銘した。また、北海道、札幌市、政府らの代表者およびその代理による祝辞があった。さらに開催側からは、上田誠也 LOC 委員長の歓迎の挨拶、日本学術会議会長、IUGG 会長、IUGG 事務局長らの挨拶が続いた。式典の後は、レセプションが行われ、北大オーケストラの演奏があり、大きな会場に入りきれないほどの参加者で盛り上がった。

他にも、海外からの参加者の同伴者向けの企画や、札幌地域の青少年向けの教育的企画なども数多く実施され、地元のマスコミに盛んに取り上げられた。また、気象関連では、北海道大学において中谷宇吉郎記念シンポジウムが行われた。さらに、IASMAS 事務局の企画で、昼食時間帯に Sushi-Lunch Lecture Series と称して、先端で活躍中の研究者によるトピックの特別講義が連日行われた。

(4) 総会開催の経緯

日本で総会を開催するについては、数年以上にわたる経緯があった。前々回の1995年の第21回総会 (米国・ボルダー) の機に、次々回にはアジアで最初の日本で開催してはどうかという雰囲気があり、当時の上田誠也 IUGG 日本代表 (当時の日本学術会議地球物理学研究委員長) がその空気を受けて検討を始めたのが本総会実現の始まりであった。実施の可能性を検討する段階で、経費の問題、担当部局の問題、開催地その他いろいろの難問が噴出したが、1999年の英国バーミンガム第22回総会前には総会招請の立候補の意向を日本側として固める必要があった。日本での開催地としては札幌と京都が候補として検討対象になったが、諸事情を勘案して札幌になった。バーミンガム総会では、第23回開催地を決定するビジネス会議で、インドが対立候補として急浮上し、札幌への招致が危うくなりかけたが、当時の荒牧重雄日本代表らの努力の甲斐あって、最終決戦投票において札幌に決定した。その時の日本招請ミッションの方々の心労に接して、大変だなと察したのを思い出す。しかし、それは、開催側にとって新たな戦いの始まりでもあった。

大規模な国際会議の開催には日本学術会議と我々関連学会との共催という形が望ましく、また経費面でも

そうする必要があるもので、それを実現する努力が払われた。国際会議の共催を他学問分野からも要請されている日本学術会議において、その共催を競合して勝ち取ることは容易でなかったが、結果的には何とか希望は適った。これにより、総会開催の1年前に日本政府公認の下での公式組織である国際会議の組織委員会が成立することになった。もちろん、現実には事前の組織委員会が、公式化される以前も総会実施のためのあらゆる準備を進めていた。気象分野からは、住 明正氏 (学会理事) と私、木田秀次 (日本学術会議気象研連代表) との2名が組織委員として参加した。特に住委員は LOC 幹事会メンバーとして総会参加者向けのインターネット機器の整備を担当した。私は募金を担当した。

総会実施の組織やそのメンバー、その他の総会に関する多くの情報については、IUGG2003札幌総会のホームページ (<http://www.jamstec.go.jp/jamstec-e/iugg/>) に案内されている。

(5) 札幌総会の特別企画

前述のように、札幌への総会招請は外国の他候補との競合のなかで決定された。そういう競合においては、日本開催ならではの魅力ある特徴を前面に押し出す必要があったが、その企画の1つとして、諸外国 (特にいわゆる発展途上国) の若手研究者に旅費の援助をし、国際会議に参加する経験を与えるために力を入れると約束したことである。その目的で、約5000万円が総会開催経費予算に計上された。その約束は実行され、諸外国の約500名に及ぶ若手研究者の参加を支援した。この援助資金は、日本の主催参加学会の個人会員や協力企業からの寄附によるところが大部分である。

特徴の2つ目は、市民向けプログラムの教育特別企画である。それらはアウトリーチと呼ばれ、地域の市民や青少年に地球科学の現状を伝えるよい機会でもある。その内容については後の記事で紹介されている。

(6) 総会の経費

総会を開催する上で常に困難がともなうのが経費の捻出である。本総会においては、予算として約3億円の経費の規模が見込まれたが、それを支える収入の基本は参加者の参加登録料である。参加者数を約5000名と見込んで、登録料は少々高いが5万円と定められた。現実には参加者は4300名程度で、しかも早割制度や学割制度を活用する参加者も多いだろうし、登録料収入も見込み以下になる恐れがあるなど、登録料以外の収入を考えないと運営できない。LOC 関係者が頭を悩ま

す問題である。これについては、北海道と札幌市から各々3000万円という多額の支援があり、日本学術会議の共催金約3000万円、そして個人献金や企業の寄附・展示料らの計約6000万円等々によって賄われることになった。結果的には、予算の15%増しの総計約3億5千万円の経費規模であったが、赤字を出すことなく無事に会計を閉めることができた。なお、日本気象学会の個人献金の合計は約150万円で、他の学会のそれとほぼ同程度であった。他学会を含む献金者名のリストは IUGG2003の HP に掲載されている。募金を担当した委員の1人として、献金をお寄せ頂いた会員や企業に改めてここに感謝の意を表します。

(7) IAMAS/国際気象学・大気科学協会の個別総会
IUGG 傘下にある IAMAS も4年毎に IUGG に合わせて総会を開いているが、この総会が参加国の代表者が集い権威を要する議決を行う公式の総会である。なお、公式総会開催の中間に当たる2年後の総会は研究発表を中心にした科学的研究集会で公式の議決はしない総会であるが、前回は2001年夏にオーストリアの州都インスブルックにて開催されたので、記憶に新しいだろう。

今回の IAMAS 総会では、任期満了の役員の交代人事の決定があった。IAMAS の会長は、スイス工科大学の Davis 教授から、米国の MacCracken 博士に交代した。IAMAS 理事会の委員の1人である住 明正教授はもう一期4年の自動的留任が承認された。

この協会毎の総会で、IUGG 全体総会に提案する IAMAS としての議決提案内容が検討された。すなわち、2つの議題が出され、1つは、日本の国立極地研究所が計画を推進している南極 MST/IS レーダー建設と成層圏の研究観測を実施する計画案の支持、もう1つは、IUGG 事務局長の List 教授 (カナダ・トロント大学) の提案で、熱帯域でしばしば発生する森林火災が雲と降水にどのように影響しているかを研究する案に対する支持である。前者は直ぐに承認された。一方、後者は議論があり、IUGG 総会には慎重に提案すべきであるとの意見が出されたが、最後の IUGG ビジネス総会では結局これら2つとも IUGG2003総会の決議として承認された。決議文 (英文) に関心の有る方は IUGG の HP (<http://www.iugg.org/>) を参照されたい。

また、今回の IAMAS 科学集会としての開催予定地が検討され、中国の北京が改めて確認された。実は、前回の2001年インスブルックでのビジネス総会で北京

とほぼ決まったが開催の時期が7月であったため、その季節の北京の暑さが敬遠された。それで、時期を少し秋よりにして8月上旬に計画変更されたという経緯があった。この変更で少しは涼しくなるのかどうかは実際に参加してみないと分からないが、中国の代表者の私への説明では8月上旬は「立秋」である、とのことであった。日本からも多くの参加者があるよう期待したい。HPは、<http://www.IAMAS2005.com>。

(8) おわりに

今回の総会には大変悩ましい問題がつきまとった。それは春に流行のピークとなり、総会を直撃しそうな気配さえあったSARS問題である。幸い総会直前になってほぼ治まり、深刻な問題は生じなかった。しかし、これで参加できなくなかった中国人も少なくなかったようである。事実、中国からの研究発表で直前の取り止めが目立った。

若手研究者の発表形態として好まれるポスターセッションも盛んであるが、今回の総会では、口頭発表会場から徒歩で数分の距離がある所にポスター専用の会場が設けられた。時間帯を設定しての入れ代わり制のポスター展示であったが、口頭発表のプログラムとの時間帯の整合性が分野によっては必ずしも良くなく、そのためポスターを見にくる人が少なかったのは惜しまれる。

次回のIUGG2007総会の開催は、イタリアのペルージャとオーストラリアのメルボルンとの2か所が立候補したが、イタリアに決定した。また、IUGG2003総会決議として研究計画の10件と本総会組織委員会等への感謝の決議が採択され、その中に、前述のIAMASからの2つの提案も採択された。そして、次回イタリアでの総会成功を願って、本IUGG2003総会は、11日午後5時に閉会された。(木田秀次)

以下、本号から3回にわたり、IAMASの関係したシンポジウムおよびワークショップのうち44、およびアウトリーチ活動に関する報告を3回に分けて掲載します。ご多忙中、快くご執筆にご協力いただいた皆様にこの場を借りて深く感謝いたします。(編集委員会)

2. 地球科学の未来 (U8: Geosciences: The Future (GTF))

IUGG最終日、7月11日(金)の午前中に Union Symposium 8として、“Geosciences: The Future (GTF)”と題するシンポジウムが開催された。このシ

ンポジウムはIUGG副会長のUri Shamir (イスラエル工科大学) が企画し、IAMASやIAHS等IUGG傘下の7学協会から1人ずつ推薦された若手代表によって事前に準備構成された。

まず、Shamirが壇上に立ち、今後10年位の時間スケールで、IUGGや傘下の各学協会の現状と将来へ向けた研究上、活動上の取り組むべき課題を同定し公表すること、というシンポジウムの目的が紹介された。

その後、吉沢和範 (IASPEI; 北海道大学), Emily E. Brodsky (IAVCEI; 米・UCLA), 筆者 (IAHS), Claudia Simionato (IAPSO; アルゼンチン・ブエノスアイレス大学), Laura Marlene Sanchez Rodriguez (IAG; 独・ドレスデン大学), Sam Adlen (IAMAS; 英・オックスフォード大学), そして、Aaron J. Ridley の代理 (IAGA; 米・ミシガン大学) が休憩を挟みつつ、それぞれの地球物理学分野における現状と今後の展望に関して紹介した。

さらに、Adlenから、IUGG内各分野におけるより密接な共同研究の可能性について、Sanchez RodriguezからIUGGの重要な役割として先進国間のみならず途上国における地球物理学の振興をどの様にして図るべきかについて、そして、吉沢から、地球物理学が社会に貢献できる、あるいは貢献せねばならない課題についての紹介があった。

これらのトピックは、昨年夏にGTFが結成されて以降のインターネット上での議論と、2003年4月のニースで開催されたEGS/AGU/EGU合同大会の機会を利用した準備会合において、グループとして取り上げるべきトピックであると判断されたもので、グループとしての提案を上記3名が代表して発表したものである。

GTF議長のBrodskyの総括の後の質疑では、是非こういう活動を続けると良い、という肯定的な趣旨の意見が続出し、必ずしも聴衆は多くはなかったが非常に盛り上がったセッションとなった。ちなみに、Shamirは今回の総会で次期IUGG会長に選出され、何らかの形でGTFを継続させる意向の様である。現在のGTFメンバーはほぼ総入れ替えとなる予定であるが、今後も継続的に日本から貢献できるのが望ましいだろう。

なお、GTFとしての速報レポートは当日CD-ROMとして会場で配布されたが、IUGGのWeb siteにも<http://www.iugg.org/geosciences.pdf>として置かれているので、興味のある方は是非一読されたい。今